

保育士における人形劇の実践について（Ⅱ）
 —岐阜市内の保育士を対象にした人形劇に対する意識調査から—

熊 田 武 司

As for the practice of the puppet show in the nursery teacher Part II
 —From the consciousness survey to the puppet show intended
 for the nursery teacher in Gifu City—

Takeshi Kumada

Summary

How does a nursery teacher grasp the puppet show as a form of child care teaching material? Why cannot the puppet show be practiced? The nursery teacher's consideration and investigation of the practice such as puppet shows was performed, and it was clarified at what position the puppet show was introduced in child care.

Most nursery teachers recognize that the puppet show is necessary in child care. However, the puppet show is hardly actually practiced in child care. The reason is "The practice time cannot be secured", "There are neither a place nor a chance to perform", "The doll is not owned", "It doesn't know how to perform the puppet show", and "There is no stage for the puppet show."

Then, it is necessary to examine how to do so that the nursery teacher may practice the puppet show, and in future tasks to search for the method of the puppet show's expanding in child care, and to examine how the puppet show can be located in the child care.

Key words : A puppet play, Conversation that operates a puppet, Childcare teaching materials

I はじめに

「保育士における人形劇の実践について（Ⅰ）」（熊田.2009）において、岐阜市内の保育所で人形劇の実践として行われているストーリーのある人形劇および人形を使つての対話の実践状況を明らかにした。その結果、ストーリーのある人形劇および人形を使つての対話の実践は、いずれも非常に少ないことが明らかになった。その原因としては、練習時間が確保できないことや人形劇をするための仲間が確保されないこと、人形を所有していないことなどが考えられる。

本研究においては、保育士は人形劇を保育教材としてどのように捉えているのか、なぜ人形劇を実践することができないのかなど、人形劇等の実践に対する保育士の意識調査を行い、「保育士における人形劇の実践について（Ⅰ）」（熊田.2009）の結果との関係を分析することで、人形劇が保育の中でどのような位置にあるのかを明らかにしたい。

そこで、保育士が人形劇の実践に関してどのような意識を持っているのかを調査する。そして、

まず第一に、ストーリーのある人形劇（エプロンシアター、パネルシアターを除く）および人形を使っての対話の実践に対する意識について考察するものである。

本研究において取り扱う人形劇は、保育者が子どもに提供するものとする。つまり、保育者が演じる人形劇とし、子ども達が演じる人形劇については取り扱わないものとする。また、本研究による現代人形劇とは、人形を使った人形劇とする。

II 調査方法

1 対象

岐阜市内の認可保育所（園）である公立保育所29園・私立保育園19園、合計48園に勤務する保育士（正規職員、嘱託職員、臨時職員）692人を対象とした。

2 方法

岐阜市保育事業課の許可を得て、平成20年11月11日に保育事業課から各保育所（園）長をとおして保育士に調査用紙を配布し、保育事業課をとおして11月26日に回収した。

3 内容

人形劇の必要性、人形の所有、人形劇の演技、人形劇の効果に関する保育士の意識について調査した。

- (1) 対象者の属性について（2項目）
- (2) ストーリーのある人形劇について（11項目）
- (3) 人形を使っての対話について（6項目）
- (4) パネルシアターについて（10項目）
- (5) エプロンシアターについて（10項目）

以上のうち、今回は(1)(2)(3)の調査結果を使用し、人形劇に対する意識について考察するものとした。

III 結果

1 対象者の属性について

調査対象者692人に対して、有効回答数は575人（有効回収率83.1%）であった。

対象者の勤続年数（図1）は、1年目は8.0%（46人）、2年目は5.6%（32人）、3年目は7.3%（42人）、4年目～10年目は37.9%（218人）、11年目～20年目は14.4%（83人）、21年目～30年目は11.7%（67人）、31年目以上は15.1%（87人）であった。

分類項目に1年目・2年目・3年目を単独で設けたのは、勤続若年者の人形劇に対する意識を調査するためである。

岐阜市においては、勤続10年目以下の保育士が58.8%で、全体の半数以上をしめていた。公立保育所と私立保育園とでは、勤務年数の割合が異なると思われるが、本論には直接関係しないため、今回は全体の割合のみにとどめるものとする。

対象者の担当クラス（図2）は、所長・園長は4.0%（23人）、0歳児は7.5%（43人）、1歳児は16.2%（93人）、2歳児は20.9%（120人）、3歳児は12.0%（69人）、4歳児は8.9%（51人）、5歳児は9.7%（56人）、リーダー・フリーは19.7%（113人）、無回答は1.2%（7人）であった。

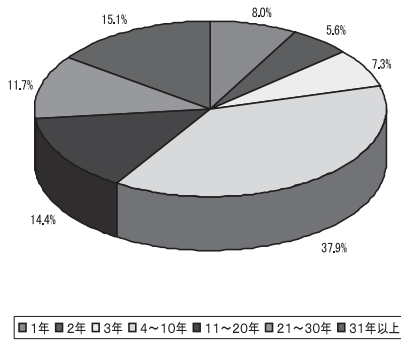


図1 勤続年数

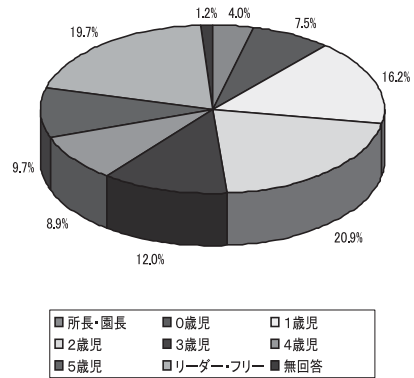


図2 担当クラス

岐阜市においては、3歳以上児クラス担当の保育士が30.6%であるのに対し、3歳未満児クラス担当の保育士が44.6%と全体のほぼ半数を占めていた。

2 ストーリーのある人形劇に対する意識調査について

(1) ストーリーのある人形劇の必要性

「担当する子どもに対してストーリーのある人形劇は、保育の中で必要だと思いますか」という問に対して、とても必要であると回答したのは21.4%（123人）、必要であると回答したのは69.6%（400人）であり、保育士の91.0%がストーリーのある人形劇は必要であると認識しているという結果であった。これに対して、ほとんど必要ないと回答したのは7.7%（44人）、必要ないと回答したのは0.3%（2人）という結果であった。（図3）

また、「ストーリーのある人形劇を演じるための人形を所有していますか」という問に対して、所有していると回答したのは49.2%（283人）であり、所有していないと回答したのは49.2%（283人）、無回答1.6%（9人）であり、人形の所有の有無については全く同数という結果であった。（図4）

(2) 勤続年数とストーリーのある人形劇の必要性との関係

勤続年数とストーリーのある人形劇の必要性(図5)から、すべての年代でとても必要である、必要であるを合わせた割合が80.0%以上であることがわかる。特に、21~30年ではストーリーの

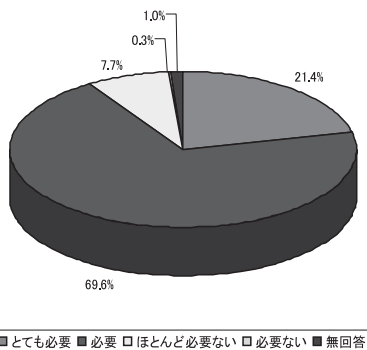


図3 ストーリーのある人形劇の必要性

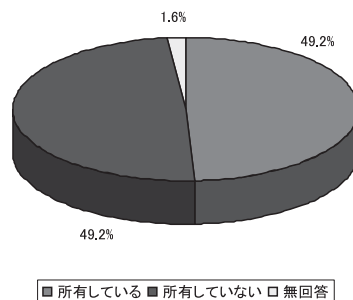


図4 ストーリーのある人形劇の人形の所有

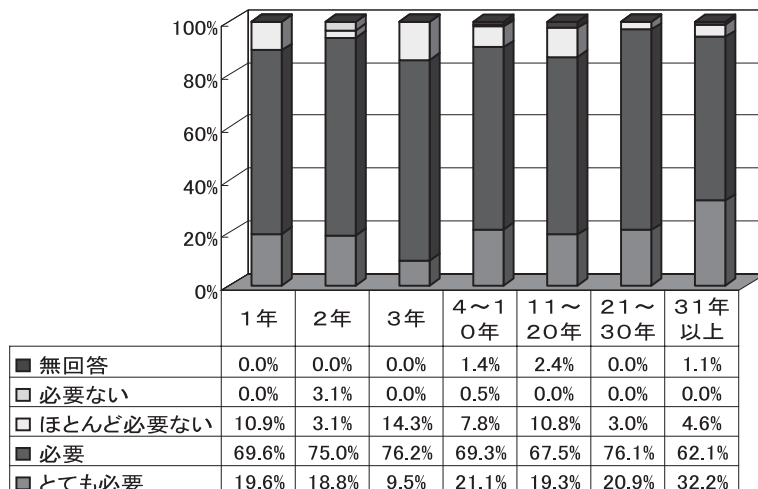


図5 勤続年数とストーリーのある人形劇の必要性

ある人形劇が必要であると考えている保育士は97.0%（65人）であり、31年以上においてはととても必要であると考えている保育士が32.2%（28人）であるという結果であった。

(3) 担当クラスとストーリーのある人形劇の必要性との関係

担当クラスとストーリーのある人形劇の必要性（図6）から、0歳児、1歳児を除くクラス担当保育士の90.0%以上が、ストーリーのある人形劇を必要であると考えていることがわかる。特に、所長・園長は必要であると回答したのが100.0%であるという結果であった。0歳児担当保育士においては、とても必要であると回答したのは11.6%（5人）であり、必要であると回答したのは53.5%（23人）であり、ほとんど必要ないと回答したのは34.9%（15人）という結果であった。1歳児担当保育士においては、とても必要であると回答したのは16.1%（15人）であり、必要であると回答したのは68.8%（64人）であり、ほとんど必要ないと回答したのは12.9%（12人）

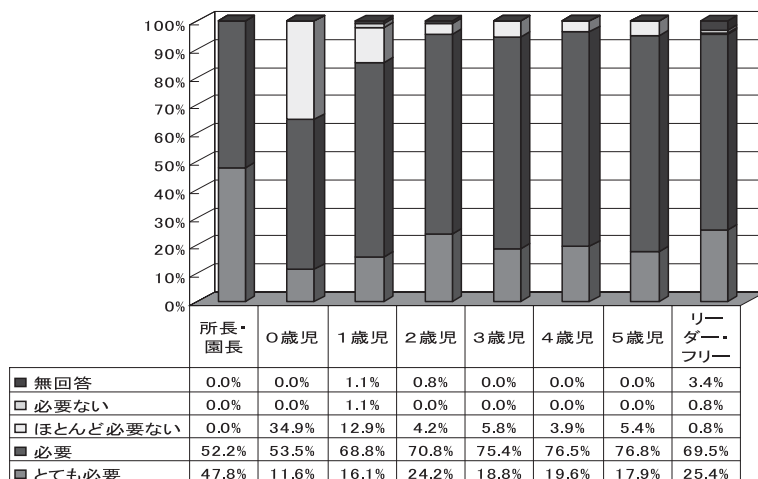


図6 担当クラスとストーリーのある人形劇の必要性

という結果であった。

(4) ストーリーのある人形劇の子どもに対する効果

「子どもにとってストーリーのある人形劇にはどんな効果があると思いますか」という問に対して、次の17項目の中から効果の高い順に5項目を選択してもらった。

選択された結果に対して、1位5ポイント（以下pと記述する）、2位4p、3位3p、4位2p、5位1pを付加して得点を算出したところ、最も得点の高かったのは、1A項目1559pという結果であった。そして、1D項目1235p、1B項目1133p、1F項目853p、1C項目816pと続き、最も得点の低かったのは、1P項目6pという結果であった。

- 1 A. 童話・昔話などへの興味を養うことができる。(1559 p)
- 1 B. 模倣活動を楽しみ、ごっこ遊び・劇遊びにつなげることができる。(1133 p)
- 1 C. 人形を擬人化し自分と同化することで、物語の世界を楽しむことができる。(816 p)
- 1 D. 人形を使うことで、物語の内容や面白さを楽しむことができる。(1235 p)
- 1 E. 子どもと保育士との信頼関係を築くことができる。(284 p)
- 1 F. 子どもの感受性を養うことができる。(853 p)
- 1 G. 子どもの創造力を養うことができる。(287 p)
- 1 H. 子どもの想像力を養うことができる。(749 p)
- 1 I. 子どもの道徳性を養うことができる。(104 p)
- 1 J. 子どもの思考力を養うことができる。(157 p)
- 1 K. 子どもの自発性を養うことができる。(20 p)
- 1 L. 子どもの表現力を養うことができる。(333 p)
- 1 M. 子どもの情緒を安定させることができる。(274 p)
- 1 N. 子どもの情操教育になる。(235 p)
- 1 O. 子どもの言葉の発達につながる。(326 p)
- 1 P. 効果はない。(6 p)
- 1 Q. その他 (7 p)

(5) ストーリーのある人形劇を演じることができるか

「ストーリーのある人形劇が演じられますか」という問に対して、演じられると回答したのは64.0% (368人)、演じられないと回答したのは6.8% (39人)であり、わからないと回答したのは27.1% (156人)という結果であった。(図7)

「勤続年数と人形劇が演じられるか」(図8)から、勤続年数に比例して演じられる割合が増すという結果が得られた。演じられない割合は、勤続年数に反比例しているわけではなく、3年目が21.4% (9人)で最も高く、次が2年目の12.5% (4人)という結果であった。また、1年目はわからないと回答した保育士が最も多く、約半数の47.8% (22人)という結果であった。

「演じることができる理由」という問に対して、次の8項目の中から理由の大きい順に3項目を選択してもらった。選択された結果に対して、1位3p、2位2p、3位1pを付加して得点

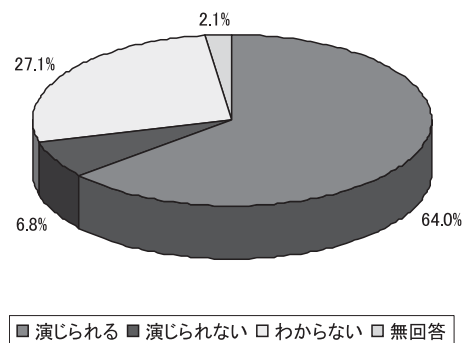


図7 人形劇を演じられるか

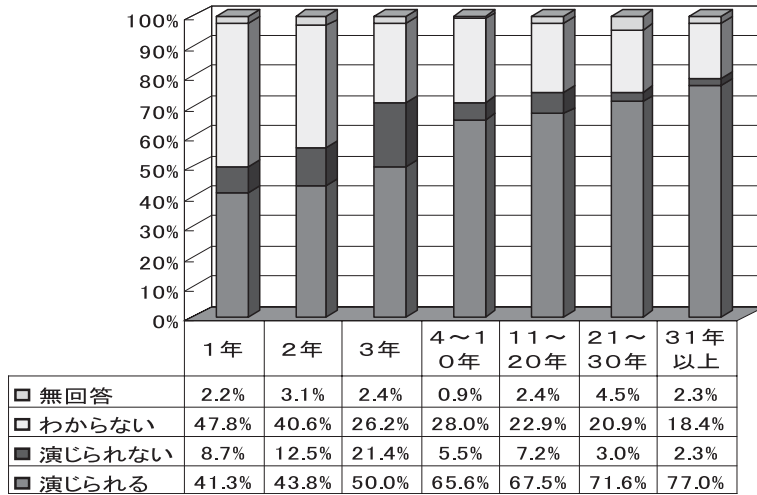


図8 勤続年数と人形劇が演じられるか

を算出したところ、最も得点の高かったのは、2 B項目1063 p という結果であった。そして、2 G項目436 p、2 D項目361 p と続き、最も得点の低かったのは、2 F項目62 p という結果であった。

- 2 A. 自分自身が人形劇を楽しみたいから。(295 p)
- 2 B. 人形劇で子どもを楽しませたいから。(1063 p)
- 2 C. 子どもにとって保育士が身近な存在だから。(136 p)
- 2 D. 行事の出し物を担当するから。(361 p)
- 2 E. 自分の人形を持っているから。(110 p)
- 2 F. 保育所（園）が人形を所有しているから。(62 p)
- 2 G. 保育士が人形劇を演じることで、子どもが物語を身近に感じることができるから。(436 p)
- 2 H. その他 (19 p)

「なぜ人形劇を演じることができないのですか」という問に対して、次の10項目の中から理由の大きい順に3項目を選択してもらった。選択された結果に対して、1位3 p、2位2 p、3位1 p、を付加して得点を算出したところ、最も得点の高かったのは、3 A項目286 p という結果であった。そして、3 D項目123 p、3 G項目109 p と続き、最も得点の低かったのは、3 F項目20 p という結果であった。

- 3 A. 練習する時間を確保できないから。(286 p)
- 3 B. 人形劇の舞台がないから。(79 p)
- 3 C. 人形劇をすることができる人数が集まらないから。(72 p)
- 3 D. 演じる場所・機会がないから。(123 p)
- 3 E. 演じることが恥ずかしいから。(43 p)
- 3 F. 台詞を覚えることができないから。(20 p)
- 3 G. 自分も保育所（園）も人形を所有していないから。(109 p)
- 3 H. 人形劇の演じ方を知らないから。(84 p)
- 3 I. 人形劇団を招聘する方がよいから。(34 p)

3 J. その他（20 p）

また、勤続年数と演じられない理由の関係を調べたところ、2年目・3年目ともに最も多い理由は3 A項目であり、2年目は14 p、3年目は22 pという結果であった。次に多い理由は、2年目は3 B項目9 p、3年目は3 D、3 G項目16 pという結果であった。

(6) どうしたらストーリーのある人形劇を演じることができるか

「どうしたら人形劇を演じることができると思いますか」という問に対して、次の7項目の中から理由の大きい順に3項目を選択してもらった。選択された結果に対して、1位3 p、2位2 p、3位1 pを付加して得点を算出したところ、最も得点の高かったのは、4 A項目687 pという結果であった。そして、4 C項目533 p、4 B項目427 pと続き、最も得点の低かったのは、4 E項目130 pという結果であった。

- 4 A. 講習会等で人形劇の演じ方を学ぶ。(687 p)
- 4 B. 自分または保育所（園）が人形を所有する。(427 p)
- 4 C. 練習時間を確保する。(533 p)
- 4 D. 人形劇をすることができる人数（仲間）を集める。(279 p)
- 4 E. 人形劇の舞台を製作する。(または購入する) (130 p)
- 4 F. 即興の人形劇の演じ方を学ぶ。(336 p)
- 4 G. その他 (33 p)

3 人形を使つての対話に対する意識調査について

(1) 人形を使つての対話の必要性

「担当する子どもにとって人形を使つての対話は、保育の中で必要だと思いますか」という問に対して、とても必要であると回答したのは24.2%（139人）、必要であると回答したのは65.4%（376人）であり、保育士の89.6%が人形を使つての対話が必要であると認識しているという結果であった。これに対して、ほとんど必要ないと回答したのは7.8%（45人）、必要ないと回答したのは0.3%（2人）という結果であった。（図9）

また、「人形を使つての対話のための人形を所有していますか」という問に対して、所有していると回答したのは64.5%（371人）であり、所有していないと回答したのは33.2%（191人）、無回答2.3%（13人）であり、保育士の約2/3が人形を所有しているという結果であった。（図10）

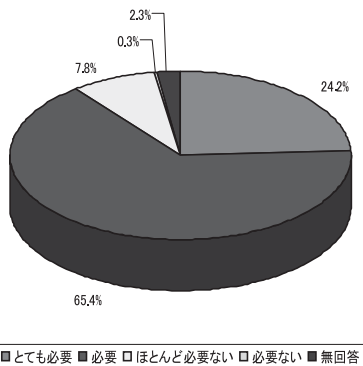


図9 対話の必要性

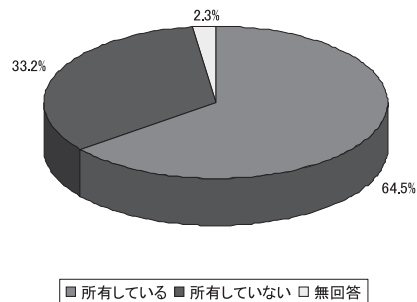


図10 対話するための人形の所有

(2) 勤続年数と人形を使つての対話の必要性との関係

勤続年数と対話の必要性（図11）から、すべての年代でとても必要である、必要であるを合わせた割合が85.0%以上であることがわかる。特に、人形を使つての対話が必要であると考えている4年目～10年目の保育士が、192人存在するという結果であった。また、各年代において人形を使つての対話の必要性に対する意識には、ほとんど差異が無いという結果であった。

(3) 担当クラスと人形を使つての対話の必要性との関係

担当クラスと対話の必要性（図12）から、4歳児、5歳児を除くクラス担当保育士の85.0%以上が、人形を使つての対話を必要であると考えていることがわかる。特に、0歳児・2歳児担当においては、とても必要であると回答した保育士が30.0%以上であり、2歳児担当においては、ほとんど必要ないと回答したのはわずか1.7%（2人）という結果であった。それに対して5歳児担当保育士においては、とても必要であると回答したのは5.4%（3人）であり、必要である

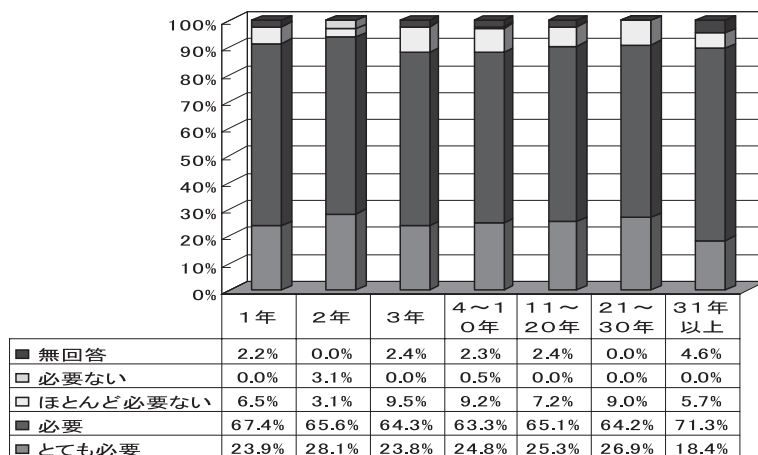


図11 勤続年数と対話の必要性

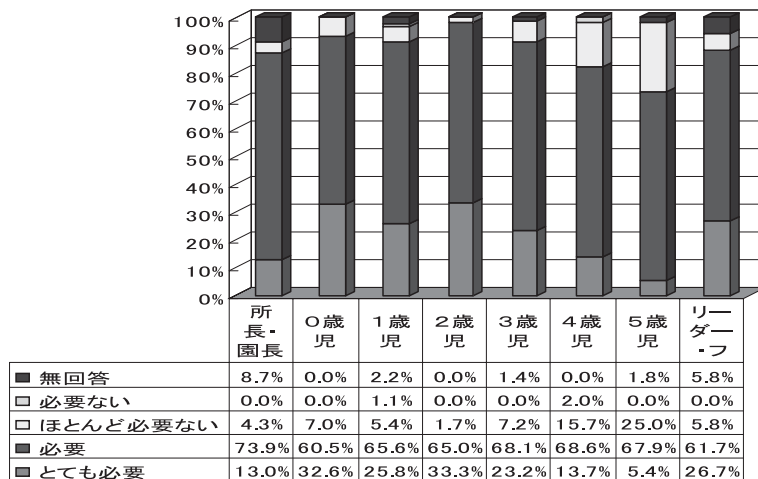


図12 担当クラスと対話の必要性

回答したのは67.9%（38人）であり、ほとんど必要ないと回答したのは25.0%（14人）という結果であった。

（4）人形を使つての対話の子どもに対する効果

「子どもにとって人形を使つての対話にはどんな効果があると思いますか」という問に対して、次の16項目の中から効果の高い順に5項目を選択してもらった。

選択された結果に対して、1位5p、2位4p、3位3p、4位2p、5位1pを付加して得点を算出したところ、最も得点の高かったのは、5B項目2026pという結果であった。そして、5A項目1155p、5D項目901p、5F項目746p、5M項目455pと続き、最も得点の低かったのは、5O項目12pという結果であった。

- 5 A. 子どもと保育士との信頼関係を築くことができる。(1155 p)
- 5 B. 子どもの集中力を高めることができる。(2026 p)
- 5 C. 子どもの忍耐力を高めることができる。(63 p)
- 5 D. 子どもの感受性を養うことができる。(901 p)
- 5 E. 子どもの創造力を養うことができる。(342 p)
- 5 F. 子どもの想像力を養うことができる。(746 p)
- 5 G. 子どもの道徳性を養うことができる。(224 p)
- 5 H. 子どもの思考力を養うことができる。(290 p)
- 5 I. 子どもの自発性を養うことができる。(118 p)
- 5 J. 子どもの表現力を養うことができる。(445 p)
- 5 K. 挨拶ができるようになる。(324 p)
- 5 L. 生活習慣を学ばせることができる。(398 p)
- 5 M. 子どもの情緒を安定させることができる。(455 p)
- 5 N. 子どもの言葉の発達につながる。(371 p)
- 5 O. 効果はない。(12 p)
- 5 P. その他 (12 p)

IV 考察

1 ストーリーのある人形劇に対する意識調査について

ストーリーのある人形劇が保育の中で必要であると認識している保育士は、全体の91.0%であるという結果であったが、「保育士における人形劇の実践について（Ⅰ）」（熊田, 2009）で明らかになったように保育所で人形劇が実践されることは非常に少ないのである。この原因を探ることが必要である。第一に、人形を所有していないと回答した保育士が全体の半数存在しており、これが人形劇の必要性を認識していても実践ができない理由の一因であると考えることができる。

ストーリーのある人形劇の必要性について、勤続年数では差異がないものの、担当クラスにおいては差異があり、ストーリーのある人形劇はほとんど必要がないと考えている保育士が0歳児担当全体の34.9%、1歳児担当全体の12.9%存在することが明らかになった。これは、「保育士における人形劇の実践について（Ⅰ）」（熊田, 2009）で述べた0歳児・1歳児担当保育士の半数が人形劇の実践を行っていないことの裏付けとなるものである。

ストーリーのある人形劇の子どもに対する効果を保育士は、「童話・昔話などへの興味を養う」「人形を使うことで、物語の内容や面白さを楽しむ」「模倣活動を楽しみ、ごっこ遊び・劇遊び

につなげることができる」「人形を擬人化し自分と同化することで、物語の世界を楽しむ」「子どもの感受性、想像力、表現力を養うことができる」と捉えていることが明らかになった。これらを目的として、保育士は人形劇を子どもに提供しているのである。したがって、常に子どもと接している保育士が、子どもの姿を見て人形劇の効果を前述のように捉えていることから、子どもに対して人形劇は効果があることが証明されたものと考えることができる。また、「効果がない」が6pであったことも、人形劇の効果について証明されたと考えられる一因である。

人形劇には前述のような効果があることは認識されているが、調査によって64.0%の保育士は人形劇を演じることができ、27.1%はわからない、そして、6.8%が演じることが出来ないということが明らかになった。

わからないと回答した保育士も含め、演じられない理由として上位にあがったものは、「練習する時間を確保できない」「演じる場所・機会がない」「人形を所有していない」「人形劇の演じ方を知らない」「人形劇の舞台がない」であった。これに対して、人形劇を演じるためには、「人形劇の演じ方を学ぶ」「練習時間を確保する」「人形を所有する」ことが必要であることが明らかになった。

人形劇が演じられると考えている保育士の割合が、勤続年数に比例しているという結果については、保育経験が増すことにより保育に対する余裕が生まれていくことが、その要因ではないかと推察することができる。人形劇が演じられる理由として、「人形劇で子どもを楽しませたい」が他の理由から抜き出た一番の理由であった。保育士自身が学ぶこと、時間を確保することを実行するためには、演じられる理由としては295pで少数ではあったが、「自分自身が人形劇を楽しむこと」が大切であり、保育士自身が人形劇をしたいと思うことが必要なのである。

2 人形を使つての対話に対する意識調査について

人形を使つての対話に関しても、ストーリーのある人形劇と同様に、保育士はその必要性を認識しているという結果が明らかになった。そして、対話に使用する人形は、人形劇を行う人形よりも15.3%多くの保育士が所有していることがわかった。これが、「保育士における人形劇の実践について（I）」（熊田.2009）で明らかになった6回以上実践されている数が多い一因であると考えられる。

担当クラスと人形を使つての対話の必要性との関係については、4歳児クラス担当では17.7%、5歳児クラス担当では25.0%が必要ないと考えていることが、「保育士における人形劇の実践について（I）」（熊田.2009）で明らかになった4歳児・5歳児担当の実践回数が少ないという一因になっていると考えられる。

人形を使つての対話の効果について、「集中力を高めることができる」「信頼関係を築くことができる」「感受性、想像力、表現力を養う」「情緒を安定させることができる」「生活習慣を学ばせることができる」が調査結果として表れたことで、保育士が実践の目的としているものがそのまま効果として表れていると考えられる。

V 今後の課題

本研究によって、ストーリーのある人形劇および人形を使つての対話のいずれも、保育士は保育の中で必要であるということを知っていることが明らかになった。また、本研究の調査によって、子どもに対する人形劇の効果について明らかになった。しかし、現状は、練習する時間を確

保できない、演じる場所・機会がない、人形を所有していない、人形劇の演じ方を知らないなどの理由で人形劇は実践されていないのである。そこで、保育士が人形劇を実践するためにはどうすればよいのかを検討することが必要である。

また、今回取り扱うことをしなかった、保育士一人でも実践することができるパネルシアターやエプロンシアターについても、調査の結果を分析して保育士の意識を明らかにすることが必要である。

そして、保育における人形劇の普及方法を探求すると共に、人形劇を保育の中にどのように位置づけていくことができるのかを検討することが今後の課題である。

謝 辞

本研究にあたり、ご協力をいただいた岐阜市福祉部保育事業課および岐阜市内保育所（園）に勤務する保育士の皆様に深謝いたします。

引用文献・参考文献

1. 東 裕子；1996、「人形劇の人形の構造的特質についての一考察」、『清和女子短期大学紀要』、第25号
2. 石垣恵美子・玉置哲淳（編著）；1993、「幼児教育課程論入門」、建帛社
3. 川尻泰司；1986、「日本人形劇発達史・考」、晩成書房
4. 熊田武司；2009、「保育士における人形劇の実践について（Ⅰ）—岐阜市内の保育所（園）に勤務する保育士を対象にした調査から—」、『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第41集、pp87～99
5. 森上史朗；1993、「子どもに生きた人・倉橋惣三—その生涯・思想・保育・教育—」、フレーベル館
6. 日本演劇教育連盟（編集）；1994、「新人形劇入門」、晩成書房
7. 吉田博子・藤田佳子；2007、「幼児教育における児童文化—実習保育所における児童文化の現状について—」、『淑徳短期大学研究紀要』第46号、pp131～143

